

愛知淑徳短大 古田 幸子

1. 足蹠の発汗および履物の緊縛等による靴下の汚染度は他の被服に比べ極めて大きくそのため種々の微生物が繁殖して不快臭を帯び衛生上よくない結果をもたらしている。これら悪臭は汗の中に含まれる有機物が微生物によって分解されるために発生するものといわれ、水虫等の病害を防止する上にも有効な防臭、防黴加工が施されねばならない。筆者は短時間の着用でかなりの悪臭を放つ靴下より揮発性塩基ガスを捕集し、防黴加工処理剤の効果を検討した。

2. 被検者としては健康な女子高校生、成年男子を対象とし、平常授講時、勤務時、および運動時を対象とした。女子の着用靴下は木綿の白のソックスで5種類の防黴剤を処理し、履物は布製、ゴム底のズック靴、男子はナイロン靴下の足底部に試験布を添付し、一定時間着用後回収し、Conway法により揮発性塩基窒素の測定およびpHの測定を行なった。

3. 先ず個人差の有無、左右差の有無、および平常時、運動時、性別等について検討した結果、平常時においては個人差は認められたが、左右差は認められなかった。1日着用後36°Cで2日間放置した状態では4~5倍量の増加が認められた。運動時(テニス)においては平常時の約5~10倍量の増加が認められ、防黴加工処理靴下においても履物の汚染している状態では処理濃度を高くしても効力は認められなかった。新しい履物において効力が認められた。